

医療の届かないところに医療を届ける

JAPAN HEART NEWS



冬
2022

- 01:カンボジア チャンテッ君の来日治療
- 02:ミャンマー 2年ぶりのスタートライン
- 03:ラオス 手術活動と災害救援でわかった“支援の意味”
- 04:国際緊急救援(iER) 医療的ケア児との出逢い
- 05:SmileSmilePROJECT お母さんからの手紙



01 カンボジア

命の希望をつなぐ～チャンテッ君の来日治療



来日前のカンボジア入院時

ジャパンハートは8月から9月にかけて、カンボジアでの治療が困難な8歳の小児がん患者チャンテッ君を日本に招き、9月7日に手術を実施しました。

チャンテッ君は2月に胚細胞腫瘍（はいさいぼうしゅよう）という珍しいがんを胸に患っていることが分かり、大好きな学校を休んでジャパンハートこども医療センターに入院し、抗がん剤治療を行っていました。

胚細胞腫瘍は、先進国では抗がん剤と手術による治療で80%近くが助かると報告されていますが、胸にできた腫瘍を切除するには専門医と高度な設備が必要であり、カンボジア国内ではこのような高度な手術ができる病院がありません。

しかし「生まれた場所によって助かるはずの命が助からない」という現実を変え、唯一の希望となる来日治療を行うべきだと私たちは考えました。そして、ありがたいことに国立病院機構岡山医療センターから受け入れをご提案いただき、来日手術が決定したのです。

日本に到着後、岡山医療センターに入院したチャンテッ君。あらかじめ抗がん剤で抑えておいたとは言え、腫瘍は大きく重要な血管を圧迫しており、場合によってはいったん心臓をとめて、人工心肺を使う可能性もありました。実際には幸い人工心肺を使用することなく、約10時間に及ぶ手術の末、腫瘍をすべて摘出することができました。手術後も数日間は集中治療室で人工呼吸器をつけて過ごし、ようやく元の病室へ。

そして術後1週間ほどで歩けるようになりました。チャンテッ君のお気に入りは、病院内にある図書室へ行って本を読むこと。日本語は読めなくても絵本を眺めて過ごします。日を追って食べられる食事の量も増え、笑顔が戻ってきました。



大きな手術を乗り越えた後

体調が回復し、ついに帰国が決まったとき、退院したら何をしたいか尋ねられると「学校へ行きたい！」と答えました。入院のために我慢していた勉強を再開できることが楽しみなようです。退院時には、岡山医療センターの医療チームの方々に見送られ、温かいメッセージもいただきました。

今回の来日治療に際して、ジャパンハートは支援者の皆様からのご支援を募りました。日本だけでなく、カンボジアでも寄付を募りましたが、その結果、9月だけで4,730名のカンボジアの方々から\$35,455に上る寄付があったのです。これは、普段の月の約3倍となります。

「助かるはずの命を助けたい」。命の希望をつなぐ願いは国境を越え、両国の医療者の努力がチャンテッ君の治療を実現しました。



退院時、ずっと離ればなれだったお母さんと再会できて抱きつくチャンテッ君

チャンテッ君は術後入院を経て9月29日にカンボジアへ帰国し、お父さんと一緒にジャパンハートこども医療センターの病室に戻りました。仲の良かった友達と1カ月ぶりに再会すると、早速、一緒にカードゲームで遊んだり、日本のお土産を見せびらかしたり。さらに滞在中に覚えた日本語を使って、日本人スタッフに「ありがとうございます～！」と満面の笑顔で抱きつく姿も。帰国2日後から再発予防のための術後の抗がん剤治療を開始し、また学校に行けることを糧に頑張っていました。

そして11月1日、ついに迎えた退院の日。お母さんと久々に再会できて喜ぶ姿に、チャンテッ君の入院生活や来日治療をずっとそばで見守ってきたお父さんの目からは涙がこぼれます。たくさんのスタッフに見送られながら、3人は笑顔で故郷へと帰っていきました。



河を渡り、医療を届ける。 新たな巡回診療活動を開始。

従来の巡回診療活動（モバイル活動）では医療を届けられていなかった地区を新たに開拓していく——そんな思いから始まった新たな巡回診療活動「モバイルネクスト」。今回より、これまで新型コロナの影響により長らく停止していた短期ボランティアの受入れを再開し、看護師の短期ボランティアの方々にもご参加いただきました。

モバイルネクストは不定期に行っていたモバイル活動とは異なり、病院から遠く離れた場所でも定期的なフォローを行うことを目的として、月に一度、1台の車に医療器材を詰め込み診療活動に出向くものです。

今回の活動地はトンレサップ湖の下流にあたるプレイクリー地区のピエンチカオです。プレイクリー地区は、雨季には川が氾濫し、陸路で行くことが困難な場所。車ごと船に乗せ、1時間ほどで河を渡りきると、ようやく活動拠点に到着します。食生活に起因する高血圧、糖尿病など、2日間の診療期間に合計146名もの患者さんが受診に訪れましたが、短期ボランティアの方々のご協力で無事、活動を終えることができました。参加ボランティアからは「活動を通じて、現地の生活を垣間見ることができた」などの声をいただきました。

新型コロナの影響で昨年まで停止していた巡回診療も、その間にカンボジア人スタッフが中心となって行えるようになったおかげで、現在は継続的に活動を行える状況になりました。「医療の届かないところに医療を届ける」というミッションのもと、日本人とカンボジア人が協力し合いながら、今後もより一層、多くの方々に医療を届けていけるように、活動を続けます。

ボートに乗り込み医療の届かない集落へ



カンボジア助産師が大きく成長。「安全なお産」を支える存在に。

4月から新たに長期ボランティアとして日本人の産婦人科医が活動を開始しました。これにより、適切なタイミングでの帝王切開、誘発分娩、隣接する公立病院からのハイリスク分娩の受け入れができるようになりました。分娩を受け入れる回数も昨年より増加し、今年は10月末時点で、すでに86件となっています。

カンボジア人スタッフの分娩を扱う能力を伸ばすため、ジャパンハートこども医療センターで行われる分娩では、基本的にカンボジア人スタッフが妊婦さんを介助して、日本人スタッフはサポートに徹しています。日本では分娩を子宮口が10センチになるまでの第1期と10センチになってからの第2期に分けていますが、カンボジアでは子宮の出口が10センチまで開いてからを“分娩”と呼びます。そこで、日本でいう第1期のアセスメントでは何をすべきかという基本的なところからのスタートでした。



カンボジア人スタッフと共に出生直後のケアにあたる

長い道のりでしたが、最近ではカンボジア人スタッフにも大きな成長が見られるようになりました。妊婦さんの“いきむ”タイミングを判断して自ら声掛けをしたり、陣痛の感覚や痛みの場所を把握しようと努めたりと、彼女たちなりにお産のアセスメントをしっかりしようとする姿勢が見られます。自分が気づいた点を活かしてお産がうまく進み、喜ぶことも増えてきました。

2020年のカンボジアの新生児死亡率（出生1000人あたりの、生まれてから28日目までに亡くなる子どもの数）は13。これは日本でいうと昭和30年代後半と同じ水準です。まだリスクの高い分娩も多い環境ですが、たくさんのお母さん・お父さんの笑顔を見られる病院を作っていくためにも、引き続きカンボジア人スタッフの成長を支えていきます。

02 ミャンマー

吉岡秀人の手術再開、2年ぶりのスタートライン

7月下旬、ワッヂエ慈善病院は、治療を心待ちにする多くの患者さんや家族であふれています。2年4ヶ月ぶりにみる懐かしいこの光景。最高顧問・吉岡秀人による本格的手術活動再開です。患者さんやご家族はもちろん、私たちスタッフも、この日を本当に特別な想いで迎えました。

新型コロナウイルス感染症の世界的拡大によって日本人医療者の渡航が叶わなくなり、医療活動の縮小を余儀なくされた、2020年冬。この時、さらに大きな試練がミャンマーを待ち構えているとは、誰も想像していませんでした。

ミャンマーでは、パンデミックに続く国内の混乱によって多くの医療者が職を離れ、国公立病院の診療規模は本来の3割ほどに留まっています。もともと十分とは言えなかった国内の医療体制が、さらに厳しいものとなってしまいました。そのような状況で、私たちは現地スタッフだけで可能な範囲での医療活動は継続してきましたが、治療を望む患者さんの要望には十分に応えることができず、手術を待つ患者さんのリストは増えるばかりでした。

同じくパンデミックに苦しめられたカンボジアやラオスでは仲間たちが少しずつ、でも着実に活動を再開するのを横目に、自国の将来を憂いながら、みな医療者として悶々とした日々を送っていたのです。



口唇裂の術前診察を受ける3歳の男の子

そんな患者さんたちの声に応えるように、そして、無力感を抱いていた空白の期間を埋めるかのように、スタッフは全員一丸となって、7月22日～8月2日までの12日間を走り抜きました。この間に実施した手術は、合計153件にも上ります。

私たちは、厳しい環境下に置かれているミャンマーの患者さんたちを救うためのスタートラインに、ようやく辿りつくことが出来ました。救うべき生命のために、私たちの挑戦はこれからも続きます。



鼠径ヘルニア手術前で涙を流すピョー君

外国人のミャンマー入国規制がようやく緩和されるとの情報が入った4月下旬。私たちは、3ヶ月後の本格的手術活動再開を目標に、準備をスタートさせました。とはいえ、混乱の中にいるミャンマーでは、不確定要素が数多く、準備開始は手探りです。「ビザは本当に下りるのか」「治安の不安定な医療活動地域に日本人医療者が入れるのか」「必要な薬剤はちゃんと手に入るのか」「患者さんたちは安全に病院に来ることができるのか」—今まで当たり前だった「患者さんに医療を提供する」というスタートラインに立つまでを、これほど長く不安に感じたことはなかったかもしれません。

こうして2年4ヶ月ぶりに迎えた、本格的な医療活動の再開。ワッヂエ病院のあるザガイン管区は、ミャンマーの中でも民主化を望む住民と軍との衝突が激しく治安が不安定な地域にも関わらず、実際に始めてみると多くの患者さんが治療を求めてやってきました。



再開を記念してワッヂエ慈善病院横にて

現地スタッフの成長と活躍

7月に本格的医療活動を再開して以降、月1回のペースで集中的手術活動を実施し、10月までにすでに3回の活動を行いました。毎回、1週間～10日間という限られた期間の中で100件以上の手術を実施。治療を終えた多くの患者さんや家族が笑顔で故郷の村へと帰っていました。

実は、今のミャンマーの医療現場には、日本から数ヶ月に1度やってくる最高顧問の吉岡秀人以外、日本人の長期ボランティア医師や看護研修生はいません。国内の混乱によって外国人の入国が難しくなる中、今は活動の準備から実施、手術後の管理に至るまでのほぼ全てを、現地スタッフだけでこなしているのです。

新型コロナウイルス感染症が拡大し、病院の活動を支えていた日本人ボランティアや研修生がミャンマーを離れた2年半前、現地スタッフは「日本人医療者がいてくれないと不安だ」と口にしていました。それでも、この約2年半、自分たちだけで医療活動を守っていくという貴重な経験を着実に重ね、大きく成長してくれました。

以前と変わらない規模の医療活動を、現地スタッフだけで安全に確実に実施出来るようになった今、彼らの表情も自信と笑顔で溢れています。

団体の設立当初より、日本人とミャンマー人でコツコツと作り上げてきたワッヂェ慈善病院での医療活動。ここに再び高い志をもった日本人医療者が加われば、最高の医療チームが出来るはず。そんな日を心待ちにしながら、今日も現地スタッフたちは患者さん一人ひとりに懸命に向き合っています。



自国の混乱にも負けず医療者として成長を続ける

ニーズに応じて変化する学習支援の3つの取り組み



お花を使ったセラピー講座。勉学以外のプログラムも充実

DreamTrainには、公用語であるビルマ語ではなく少数民族の言語を母語とする子どもが多く、基礎学習でつまづいている場合が少なくありません。そのため、個々の得意不得意を視覚化し必要なサポートを行うため、オリジナル問題を使用した試験を行いました。

三つ目は、アクティブラーニングの機会拡充です。机に向かう勉強だけで終わらせるのではなく、能動的に学び答えを導き出す方法を身につけるため、デジタルアート、プログラミング作品発表会、目標設定のアクティビティなどを行いました。

将来を予測することが困難な時代の中でも、自らの人生を輝かせる術を知る大人へと成長できるよう、支援を行っています。

ミャンマーでは、初等中等教育のカリキュラム改革が行われ、2022年春より小学校・中学校・高等学校に相当する義務教育が11年制から12年制へ変更となりました。暗記型教育から思考型教育への転換も推進され、進級・進学試験で出題される問題は従来の学習方法では解くことが難しくなっています。加えて、国の情勢が不安定になったことにより多くの教職員は職を追われ、公立学校では教師不足が深刻です。

このように、DreamTrain内の学習支援の重要度が増す中、私たちは主に3つの取り組みを行いました。一つ目は、施設内で開いている学習塾の改善です。昨年度は高校生だけが参加していましたが、今年度は中学生以上を対象としました。講師は、教育大学、または担当する教科の学士以上を有し、指導経験のある方々を招いています。

二つ目は、小学3年生以上に対する施設内試験の実施です。Dream

03 ラオス

手術活動と災害救援でわかった “支援の意味”

6月、吉岡秀人による約2年半ぶりの手術活動が、ラオス北部・ウドムサイ県にて行われました。隣国の入国制限が緩和されていく中、ラオスではなかなか制限が緩和されず、苦しい2年半でした。

「どうすれば必要なスタッフの渡航を実現できるか」。現地のスタッフと一緒に知恵を出し合いながら計画を立て、約半年に及ぶ準備の結果、今回の手術活動が実現しました。

当日は17名の方が手術を受け、無事に退院していきました。1日2~4件の甲状腺手術を5日間に渡って実施しただけでなく、術後ケアを担当した看護師は、実に23日間もの間ウドムサイ県に残って患者さんを見守り続けました。

7月下旬には、手術を受けた患者さんたちの術後1カ月の診察を実施。そこにいた患者さんは15名だけでした。なぜ残りの2名は診察に来なかつたのか。その内の一人は連絡が途絶えてしまい、もう一人は交通手段がなく診察に来ることができなかつたからです。こうした理由で診察に来ないことは、ラオスでは珍しいことではありません。特にこの二人の患者さんは、どちらも少数民族の出身で、公用語のラオス語を話すことができません。そのためか、入院中もストレスを強く感じていたように見受けられました。医療に対する考え方も違います。普段、体調を崩した時に彼女たちがまず選択するのは伝統療法であって、病院で受ける西洋医学の治療ではありません。私たちにとって当たり前の生活を、異文化の押し付けのように感じたかもしれません。私たちが行っている活動は、本当の意味でラオスの人々の役に立っているのだろうか、と考えずにはいられませんでした。

それから約1カ月後、ラオス北部で豪雨災害が発生しました。私たちが活動するウドムサイ県病院は幸いその被害を免れましたが、同県都のサイを含む4地域・41村の住居1,036棟が被害を受け、死者2名、重症負傷者3名を含む3,152名の住民が被災する、大規模な災害となりました。

私たちは、洪水発生から1週間後の9月3日にウドムサイ県を訪問。特に被害の大きかった2つの村に、米や水、缶詰、タオルなどの生活物資を届けました。被災者から深く感謝され、手術活動の中で感じた心のくもりが少しだけ晴れる思いでした。



被災地支援で、村の人々の笑顔も見られた



今回手術を受けた最高齢のお二人

患者さんの気持ちを理解し、心を救う医療をしようと心がけてはいますが、配慮が足りずに治療を後悔させてしまうこともあったかもしれません。その一方で、私たちが来たことを喜び、涙を流して感謝の言葉を口にする方もいます。6月から約4カ月の間でその両方に触れ、私たちが行っている医療活動の価値や、一人ひとりの人生に関わることの責任の重さを改めて感じました。

私たちの活動はまだまだ完璧ではなく、患者さんやご家族、あるいは応援してくださる方々の期待に応えられない部分もあるはずです。それでも歩みを止めずに、今自分たちができる仕事を懸命に取り組むことで、一人でも多くのラオスの方々に「ジャパンハートに会えて良かった」と思ってもらえるよう、今後も精進してまいります。

04 国際緊急救援(iER)

コロナ禍で行き場を失った医療的ケア児との出逢い



彼との出逢いは私たちに様々なことを気付かせてくれた

2022年9月末、ジャパンハートのCOVID-19クラスター支援活動が終了しました。私たちは2020年4月以来、全国201カ所の医療機関/福祉施設に対して、のべ485名の看護師を中心とする医療チームを派遣。加えて、昨年11月に沖縄県に設置した濃厚接触者隔離施設で、9月末の閉所までに合計40名、のべ日数323日にわたり要介護の方々を受け入れてきました。濃厚接触者隔離施設では、日常的にたんの吸引や経管栄養、酸素療法、人工呼吸器使用などの医療的ケアが必要な8歳の男の子をお預かりしたことが、強く印象に残っています。

当施設は基本的に65歳以上の要介護の方を対象としていたのですが、ある日、スタッフのもとに、「自宅で子どものケアをになっている母親を始めとした家族全員が陽性となり、唯一の陰性となったお子さんは濃厚接触者であることから、関係者総出で探せども、受け入れてくれる施設や病院などがない」という連絡が入りました。この子は普段から自宅で呼吸器を使っていて、頻繁なたん吸引なども必要。万が一、感染した際の重症化リスクが高いことは、すぐにわかりました。

実は、医療従事者の中でも、小児科経験者は皆さんが想像する以上に少ないのです。医師もいなければ、万一に備えた十分な医療器材もないジャパンハートでの受け入れは難しいのでは、というのが最初の印象でした。それでもチームメンバーで議論した結果、「どこも受け入れてくれないのなら、私たちが受け入れよう」と覚悟を決めました。

スタッフだけでなく、担当の訪問看護士さんなど多くの方々によるサポートのもと、このお子さんは12日間、ジャパンハートの施設に滞在。退院時、笑顔で家族のもとに帰るのを見送りながら、「このたったひとりを受け入れることが出来ただけでも、施設を開設した意味があった」と実感しました。まさにジャパンハートが信条とする、「目の前のひとりの生まれてきて良かった」を追求した活動でした。

災害用アプリを活かした台風被災地救援

一方、9月に相次いで上陸した台風14号・15号の被害を受けて、ジャパンハートの地域医療・緊急救援事業部では、9月22日に宮崎県東臼杵郡椎葉村、翌週29日に静岡県静岡市清水区へそれぞれ医療チームを派遣。約1,000人の医療従事者が登録するコミュニティ「ジャパンハート・ソーシャル・ネットワーク」に寄せられた被災状況に関する声を確認しながら、草の根の支援活動を展開しました。

どちらの地域も、大きな避難所こそ開設されていないものの、インフラが損壊したことで日常生活に支障が生じていた地域です。椎葉村では社会福祉協議会から、清水区では福祉施設複数カ所から必要な物資の連絡があり、企業との協働開発で9月1日にローンチしたばかりの災害時支援物資マッチングシステム「Heart Stock」を活用し、飲料水や要配慮者向け介護食などを提供することが出来ました。



断水の状況下にあった清水へ直接支援を届けた

こと自然災害は、いつ起こるか分かりません。有事の際に迅速に行動するために、ジャパンハートでは「人的」「物的」両面からの支援を念頭に、備えを進めています。的には、災害ボランティア登録者の増員と訓練、そして医療従事者ネットワークの拡大。物的には、平時の備蓄と有事の速やかな寄付が出来るシステムを、企業と協働で構築していきます。今日よりもっと、誰かの笑顔を取り戻せる明日を目指して。

05 SmileSmilePROJECT

サポーターが架け橋となった 新たなイベントを実施



新型コロナウイルス感染症が全国的に拡大する間も、小児がんの子どもとその家族の外出・ご旅行を支えてきたジャパンハートのSmile SmilePROJECT。医療機関との連携も増え、2022年は、ご家族の希望の外出先に同行する個別企画を28件、テーマパークなどのイベントに複数のご家族をお招きする招待企画を19件を実施。小児がんと向き合うお子さまとそのご家族計260名にご参加いただきました。

※11月中旬時点での12月分見込み数含む

SmileSmilePROJECTはジャパンハートの医師や看護師が、小児がんのお子さまとご家族に付きそう活動ですが、ご旅行やイベントの実現には、私たちを支えてくださるボランティア、「SSPサポーター」の存在が欠かせません。サポーターとして登録してくださっているのは、医師・看護師から会社員に学生まで、様々な方がいますが、今年はそのご縁で新しい試みも実施できました。8月、サポーターの方がご自身の職場を会場に企画してくれた招待イベント「アッヴィ合同会社協賛キッズセミナー」を開催し、4組13名のご家族が参加しました。アッヴィ様は外資系のバイオ医薬品企業。そこで、小児がんの子ども達にとって近い存在である「お薬を楽しく学ぼう」をテーマに、幅広い体験を提供していただきました。参加したお子さんからは「すっごく楽しかった！また絶対参加したい」「将来は科学者、研究者になりたい」という声を、ご家族からも「普段は入れない企業オフィスに入り、たくさんの大人と交流できたことは良い経験になった」などの感想をいただきました。サポーター・企業と一緒に新たな新企画は、ひとまず大成功と言えるでしょう。



在宅療養に切替えた 男の子のお母さんからの手紙

10月に個別企画にお申込みいただいたご家族から、旅行後に頂いたお手紙をご紹介します。

「これからは、薬飲まなくていいよ、食事制限もないしやりたいことやって、行きたいところ行っていいよ」、ドクターに言われました。お家で過ごせるのに、好きなものが食べられるのに、どこにでも行けるのに…なんだろう。この気持ち。

発症して2年半、コロナもあったし、何より治療優先。手術をたくさんして体は傷だらけ。温泉など二度と行けないと思っていました。なんて、素敵な時間だったのでしょう。一瞬一瞬の表情は眩しくて、最高に可愛らしくて、キラキラしていました。初めての温泉旅行。家族風呂、たくさんはしゃぎました。枕投げして、三人で手をつないで眠りました。

翌朝、私は露天風呂に行きました。嬉しい時間のはずなのに、涙が溢れました。思い出しました。入院中、突然彼が「神様っていないんだよ」と、言いました。私は「うん」とも「そんなことないよ」とも言えずに、何も言えずにただ悲しい気持ちになりました。一人だったので、気のすむまで泣きました。でも、なんだかスッキリ。今までの頑張りがあったからこそ、こんな豊かな時間が過ごせるんじゃない？

すぐそばにスタッフさんがいてくれる安心感。素晴らしい青空。豪華な温泉旅館。そして思い出の公園、念願のテーマパークで遊ぶことができ、忘れられない時間になりました。

ジャパンハートさん、
(株)一休さん、カメラマンさん。私たちのために、素晴らしいギフトをありがとうございました。難病の子を支えてくださる全ての方に感謝いたします。心を込めて。

